

厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
総括研究報告書

高次脳機能障害の障害特性に応じた
支援者養成研修カリキュラム及びテキストの開発のための研究

研究代表者

深津 玲子：国立障害者リハビリテーションセンター病院 第三診療部長

研究要旨

本研究は、高次脳機能障害者に対する支援者養成研修のカリキュラムおよびテキストを開発し、同障害者への適切な支援につなげることを目的とする。初年度である令和2年度は1) 既存の養成研修（強度行動障害、介護職員初任者、移動介護従事者、サービス管理責任者及び児童発達支援管理責任者）の実施要項を収集し、受講対象、受講要件、時間、講義・演習内容等を比較し、2) 比較結果に基づいて、班会議において、支援拠点機関、行政、当事者団体等と意見交換を行い、研修会基礎編と応用編、各12時間（6時間×2日間）のカリキュラム案を作成し、3) 研修カリキュラム案に沿って研修基礎編のテキストを作成し、4) 同テキストを用いて、福祉行政担当職員研修を試行し、アンケート調査を行った。研修内容の理解については「理解できた」46%、「ある程度理解できた」54%と有効であることが示唆され、総合評価は「大変参考になった」67%、「ある程度参考になった」33%とおおむね好評であった。今回得られた意見等を参考に、さらにテキスト開発をすすめ、また支援拠点機関と共催で各自治体の研修会開催を重ねることで、支援者養成研修のパッケージ化を進めたい。

研究分担者

立石雅子：日本言語聴覚士協会 副会長
青木美和子：札幌国際大学人文学部心理学
科 教授
上田敬太：京都大学医学部 講師
渡邊修：東京慈恵会医科大学 教授
鈴木匡子：東北大学 教授
廣瀬綾奈：千葉県千葉リハビリテーション
センター 科長
浦上裕子：国立障害者リハビリテーション
センター病院 リハビリテーション部長
今橋久美子：国立障害者リハビリテーショ
ンセンター研究所 主任研究官
研究協力者
片岡保憲：脳損傷友の会高知青い空 理事
長

古謝由美：日本高次脳機能障害友の会 監
事
守矢亜由美：東京都心身障害者福祉センタ
ー 地域支援課 高次脳機能障害者支援担
当
鈴木智敦：名古屋市総合リハビリテーショ
ンセンター 副センター長
瀧澤学：神奈川県総合リハビリテーショ
ンセンター 総括主査
佐宗めぐみ：相談支援「楽翔」管理者
小西川梨紗：滋賀県高次脳機能障害支援セ
ンター 臨床心理士
コワリック優華：滋賀県高次脳機能障害支
援センター 看護師

A. 研究目的

高次脳機能障害の支援については、障害福祉制度の整備は進んだが、現場の支援者には未経験な者も多く、同障害の特性に応じた支援が十分行われているとは言えない。この課題に対応するため、申請者は平成 30、令和元年度厚労科研を用いて「高次脳機能障害の障害特性に応じた支援マニュアル」を開発した。また支援の実態調査及び分析を行い、障害福祉サービス現場の支援者養成が喫緊の課題であることが明らかとなった。これらの結果に基づき、本研究は、高次脳機能障害者に対する支援者養成研修のカリキュラムおよびテキストを開発し、同障害者への適切な支援につなげることを目的とする。高次脳機能障害に対応可能な支援者を増やすことで、同障害者が住み慣れた地域で生活を営める体制整備の推進を図る。

B. 研究方法

- 1) 先行する各種養成研修の実施要項を収集し、分析を行う。
- 2) 研修は基礎編、応用編の構成とし、1) を参考に、各研修カリキュラムを作成する。
- 3) 研修カリキュラムに沿って、研究代表者および研究分担者が研修テキストを作成する。
- 4) モデル研修を試行し、研修内容についてアンケート調査を行う。

(倫理面への配慮)

研修テキストには、個人が特定されるデータは使用しない。事例報告等を行う場合は、所属機関の倫理審査委員会の承認を得たうえで、インフォームドコンセントを徹底し、対象者及び家族の同意を得る。また、個人が特定できないように格別の注意を払う。加えてコンピューター犯罪のリスクを完全に防御される

よう最大限の努力をする。

C. 研究結果

1) 先行する養成研修の情報収集と分析：強度行動障害、ホームヘルパー、ガイドヘルパー、障害福祉従業者等の養成研修の実施要項を集め、対象、参加要件、時間数、講義・演習内容、受講のメリット等を比較した。

2) 研修会基礎編および応用編カリキュラム作成：1) を参考に、高次脳機能障害支援に先進的に取り組む医療、福祉の専門家、支援拠点機関職員、行政担当者、当事者団体代表より構成される当研究班会議において意見交換を行い、カリキュラム案（基礎編および応用編）を作成した。研修カリキュラムを作成する。基礎編と応用編、各 12 時間（6 時間×2 日間）とした。各カリキュラム案については 8 ページ参照。

3) 研修会基礎編テキスト作成：研修会基礎編カリキュラムに沿って、高次脳機能障害支援に先進的に取り組む医療、福祉の専門家である代表・分担研究者及び研究協力者が担当する講義部分をスライド様式（パワーポイント）で作成した。研修テキスト（基礎編）は巻末に掲載した。

4) モデル研修：基礎編テキストを用いて福祉行政担当職員研修（集合型）を行い、24 人が参加した（COVID-19 感染拡大防止のため人数を制限した）。アンケート結果は、内容の理解については「理解できた」11 人（46%）、「ある程度理解できた」13 人（54%）、総合評価は「大変参考になった」16 人（67%）、「ある程度参考になった」8 人（33%）であった。自由回答として、「当事者が市の窓口や手続き、書類について望むことを知りたい。」「実践報告を聞きたい」「窓口の担当者に求めるレベルとしては、少し詳しすぎる」「分かりやすく、テキストに書き込みもしやすかった」などが挙げられた。

D. 考察・結論

今年度は基礎編および応用編カリキュラム、基礎編テキストについておおよその内容を確定した。試行的にモデル研修を集合型で開催したが、新型コロナ感染拡大予防のため、人数を制限した。少人数の検討ではあるが、研修の理解度、総合評価は高かった。新型コロナウイルス感染の状況に鑑み、今後はオンライン研修が必要と考え、仕様を編集予定である。

本研究は、神経内科学、脳神経外科学、リハビリテーション医学、神経心理学、社会福祉学等、分野横断型の取り組みであり、高次脳機能障害者・児の生活支援を多角的にとらえて補完しあい、社会への還元を目指す試みである。

障害特性に応じたサービスを提供できる人材の育成は、社会的要請に基づく課題であり、その成果は障害福祉行政施策に直接寄与するものである。

4) その他特記すべき事項について なし

F. 健康危険情報 特になし

G. 研究発表

・論文発表

1. 本田有正、渡邊 修、武原 格、秋元秀昭、福井遼太、池田久美、安保雅博. Central neurocytoma 摘出術後の高次脳機能障害に対しリハビリテーション治療を行った一症例 臨床リハ 2020, 29(10):1077-1080.
2. 大熊 諒、帯刀 舞、岩井慶志郎、渡邊 修、安保雅博. 脳損傷者のドライビングシミュレーターによる評価と運転再開可否判定の関係性～運転再開可否判定の予測に向けた基準値の検討～ 作業療法ジャーナル 2020, 39(2):202-209.
3. Miyeong G, Baba T, Hosokai Y, Nishio Y, Kikuchi A, Hirayama K, Hasegawa T, Aoki M, Takeda A, Mori E, Suzuki K. Clinical and cerebral metabolic changes in

Parkinson' s disease with basal forebrain atrophy. Movement Disorders 35; 825-832, 2020 doi:10.1002/mds.27988

4. Oishi Y, Imamura T, Shimomura T, Suzuki K. Visual texture agnosia influences object identification in dementia with Lewy bodies and Alzheimer' s disease. Cortex 129 ; 23-32, 2020 PMID: 32422422
5. Aso T, Sugihara G, Murai T, Ubukata S, Urayama SI, Ueno T, Fujimoto G, Thuy DHD, Fukuyama H, Ueda K. A venous mechanism of ventriculomegaly shared between traumatic brain injury and normal ageing. Brain. 2020; 143(6): 1843-1856.

・学会発表

1. 渡邊 修、濱 碧、池田久美、柏原一水片木真子、竹川 徹、安保雅博：高次脳機能障害を有する脳卒中患者の家族に対する介護負担感調査 第4回 日本リハビリテーション医学会秋季学術集会. 2020, 神戸
2. 廣瀬綾奈、中島友加、小倉由紀、湧井敦子、太田令子、片桐伯真. 急性期・回復期の高次脳機能障害の子どもをもつ保護者の支援ニーズ. 第44回日本高次脳機能障害学会, 2020, 岡山(オンライン).
3. 上田敬太. 外傷性脳損傷での社会的行動障害の特徴と支援. 第44回日本高次脳機能障害学会学術総会 2020、岡山(オンライン)
4. 浦上裕子. 高次脳機能障害リハビリテーションにおける脳波検査の意義. 第57回日本リハビリテーション医学会学術集会, 2020. 8. 19, 京都
5. 今橋久美子、立石博章、小西川梨紗、宮川和彦、コワリック優香、森下英志、粉川貴司、平山信夫、深津玲子. 指定特定相談支援事業所及び指定障害児相談支援事業所における高次脳機能障害者・児への支援状況調査. 第44回日本高次脳機能障害学会,

2020, 岡山(オンライン).

H. 知的財産権の出願・取得状況 なし